

過去の報告とも一致していた。

今後 FLAIR で髄液の高信号を呈した症例に対し、器質的疾患以外に、高酸素投与によるアーチファクトを考慮する必要性を示した3症例であった。

7 ガドリニウム造影剤を用いて内頸動脈ステント留置術を行ったヨード造影剤過敏症患者の1例

鈴木 亮・森田幸太郎・本山 浩

阿部 博史・高野 弘基*

立川総合病院循環器・脳血管センター

脳神経外科

同 神経内科*

【はじめに】我々はヨード造影剤過敏をもつ内頸動脈狭窄患者に対して、ガドリニウム (Gd) 造影剤を用いて脳血管内治療を行い良好な結果を得た1症例を経験したので報告する。

症例は75歳、男性。心臓弁膜症の既往があり、以前の心臓カテーテル検査でヨード造影剤使用による重篤な副作用が認められていた。平成22年初旬、心不全が悪化し心臓手術が予定されたが、術前評価で左内頸動脈高度狭窄が認められ同部位の脳血管内治療を優先する方針とされた。既往から治療にはGd造影剤が選択された。十分な術前計画といくつかの工夫により良好な造影効果を得て治療は完遂され、術後合併症なく独歩退院した。

【結論】ヨード造影剤過敏症患者に対する脳血管内治療にGd造影剤を用いることは有用な選択肢となりうる。一方で保険適用外であり、腎不全患者での重篤な副作用が報告されるなどその使用には慎重な検討が必要と思われた。

II. 特別講演

1 腹部の画像診断の極意

横浜旭中央総合病院放射線科部長

佐藤 秀一

2 脳血管内治療のための画像診断のキーポイント：より効果的な治療のために

大分大学医学部附属病院

放射線部 准教授

清末 一路

第70回新潟癌治療研究会

日時 平成22年7月24日(土)

午後12時30分～

会場 朱鷺メッセ

新潟コンベンションセンター

中会議室301

I. 一般演題

1 放射線誘発と考えられた下顎骨悪性線維性組織球腫の1例

小山 貴寛・星名 秀行*・児玉 泰光

小野 和宏**・高木 律男

林 孝文***・朔 敬****

新潟大学大学院医歯学総合研究科

顎顔面口腔外科学分野

新潟大学医歯学総合病院インプラ

ント治療部*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

口腔保健学分野**

同 顎顔面放射線学分野***

同 口腔病理学分野****

放射線治療で生じた下顎骨骨髓炎に続発したと推測される悪性線維性組織球腫 (MFH) の1例を経験したのでその概要を報告する。患者：44歳、女性。主訴：右側下顎角部の腫脹。現病歴：1989年25歳時右側頸部悪性リンパ腫。放射線・化学療法で寛解し経過観察終了。2008年8月に右

側下唇・オトガイ部の知覚異常，右側下顎角部の腫脹と自発痛の増強のため紹介受診。CTで放射線性下顎骨骨髓炎の診断。処置・経過：抗菌薬で腫脹は一旦消退したが，2009年3月開口障害と下顎腫脹の再燃，CT・MRIで，右側下顎角部に35×25mmの軟組織陰影を認め，悪性腫瘍が疑われた。5月生検で悪性間葉系腫瘍の診断，7月全麻下で下顎骨区域切除術，DP皮弁による顔面再建術を施行。病理診断はMFH。放射線誘発性が示唆された。術後10か月で腫瘍再発はない。口腔の放射線誘発MFH発生は極めて稀で，本例を含め12報告例はいずれも顎骨に関連して発症していた。

2 口腔扁平上皮癌両側頸部郭清術症例の検討

新垣 晋・金丸 祥平・三上 俊彦
 船山 昭典・新美 奏恵・小田 陽平
 斎藤 力・林 孝文*
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 顎顔面再建学講座組織再建口腔外
 科学分野
 同 顎顔面放射線学分野*

両側頸部郭清術を行い組織学的転移を認めた口腔扁平上皮癌28症例(同時14例，異時14例)について，原発部位および占拠部位別頻度，頸部リンパ節転移様相，治療成績を同時期の片側頸部郭清術症例(71例)と比較した。原発部位別頻度は舌10/32，歯肉10/27，口底5/5，頬3/7，占拠部位別では，片側16/65，中央6/6，両側6/0であった。T別頻度はT1 3/9，T2 10/29，T3 0/3，T4 15/30，N別ではN0 10/37，N1 3/16，N2b 6/18，N2cが9/0であった。頸部転移は両群ともレベルⅠからⅢまでに多く，転移個数は平均2.8，1.5であった。歯肉癌では上顎が下顎と比較して両側転移が多かった(47%と14%)。両側および片側郭清術の5年生存率はそれぞれ58%，73%であった($p=0.609$)。

上顎歯肉癌は他部位と比較して両側頸部転移が多く慎重な経過観察が必要である。

3 口腔癌に対するCD-DST法による抗癌剤感受性試験を用いた個別化学療法の試み

佐久間 要・田中 彰*・鈴木見奈子
 山口 晃*・又賀 泉・小林 昶運**
 日本歯科大学新潟生命歯学部口腔
 外科学講座
 日本歯科大学新潟病院口腔外科*
 クラボウバイオメディカル部**

近年，顎口腔領域での患者のQOLを重視した機能温存に向けて，進行癌に対する放射線化学療法や超選択的動注化学療法などが導入されている。一方，消化器癌においては，有害事象の軽減や癌の個別化治療を目的として，抗癌剤感受性試験が行われ，一定の成果を上げている。そこで，口腔癌症例において，生検材料からCD-DST法による抗癌剤感受性試験を試みたので，臨床効果を併せて報告する。

〔症例1〕58歳，男性。舌扁平上皮癌(T3N2bM0)試験結果はT/C(%)でTXT 20.6%，CDDP 24.1%，5-FU 6.2%と高感受性を示し，臨床にてTPF全身化学療法を行い原発巣および転移リンパ節のPRを認めた。

〔症例2〕67歳，男性。口底扁平上皮癌(T2N2bMx)T/C(%)はTXT 41.4%，CDDP 19.4%，5-FU 4.4%と感受性を示した。TS-1内服による術前化学療法を施行し，原発巣のPRを認めた。

4 浅側頭動脈より両側逆行性動注法による放射線化学療法に著効を示した進行口底原発扁平上皮癌の1例

小根山隆浩・田中 彰・三浦 嘉麿
 杉浦 宏樹・南部 弘喜・山口 晃
 又賀 泉*・不破 信和**
 日本歯科大学新潟病院口腔外科
 日本歯科大学新潟生命歯学部口腔
 外科学講座*
 南東北がん陽子線治療センター**

症例は58歳の男性。2009年7月当科初診。舌，口底，下顎骨内に及ぶ腫瘍を認め，両側頸部に弾性硬リンパ節を数個触知した。臨床診断は